

洋14-90 (ショートコメント)

「ビヨンド・ザ・エッジ ～歴史を変えたエベレスト初登頂～」

☆☆

2014 (平成26) 年7月20日鑑賞

<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：リアン・プーリー

エドモンド・ヒラリー卿 (ニュージーランド人の登山家) / チャド・モイフット

テンジン・ノルゲイ (シェルパの子供) / ソナム・シェルパ

ジョン・ハント (陸軍大佐、イギリス遠征隊の隊長) / ジョン・ライト

チャールズ・エヴァンス (イギリス遠征隊員、第1次アタック隊) / エロール・シヤンド

トム・ボーディロン (イギリス遠征隊員、第1次アタック隊) / ダン・マスグローブ

ジョージ・ロウ / ジョシュア・ラター

ノフリンジ・ツェリン

ノジミー・クンサン

2013年・ニュージーランド映画・91分

配給 / KADOKAWA

◆最近、『アイガー北壁』(08年) (『シネマルーム24』52頁参照)、『K2 初登頂の真実』(12年) など、なぜか登山の映画が多い。本作は、1953年にイギリスの遠征隊が成し遂げた8848mの前人未踏の山・エベレストへの初登頂の姿を描くもの。といっても、「物語」ではなく、記録映画だから、当時撮影した映像や関係者たちのインタビューで構成されている。私は3Dで観たから、エベレストの山頂に至るまでの歩みを立体的に感じることができたのは素晴らしい体験だったが、所詮それだけのもの……。

◆世界の最高峰エベレストへの挑戦！その中で、過去何人もの犠牲者を出していたから、その偉業の達成は大変だ。しかして、今イギリスの遠征隊を率いる隊長ジョン・ハント陸軍大佐(ジョン・ライト)と、イギリス最高の登山家11名はイギリスという国家の威信をかけて事実上最後の挑戦に挑んでいた。1953年当時のエベレストに向けての先進各国の競い合いの構図は、1949年生まれの私は知るよしもないが、小学生の頃に集めていた記念切手を思い出せば、少しはその時の状況がわかる。

本作導入部では、そんな客観的な先進各国の競い合いの状況の他、イギリス遠征隊に加入していたニュージーランド出身の登山家エドモンド・ヒラリー卿(チャド・モイフット)と、シェルパの子供でありながらエベレスト登頂を目指す男テンジン・ノルゲイ(ソナム・シェルパ)に焦点が当てられていく。登山のためには順次ベースキャンプを設営していくことが不可欠だが、エベレストの頂上が近づいてくると、ベースキャンプの設営自体が大変。隊長はそれまでの隊員の働きぶりや健康状態を熟慮して第1次アタック隊員と第2次アタック隊員を2名ずつ選出するわけだが、ジョン・ハント隊長が第1次アタック隊として選んだのはエドモンドとテンジンではなく、イギリス人の隊員チャールズ・エヴァンス(エロール・シヤンド)とトム・ボーディロン(ダン・マスグローブ)。そこにはやっぱり実力主義ではなく、ある種の身分差別が……?おっと、そんな思いは絶対に口に出してはダメだが……。

◆7月25日付新聞各紙では、サッカーW杯の予選リーグ敗退を受けて、サッカー日本代表の次期監督がメキシコのハビエル・アギーレに決定したことが報道された。サッカーも登山も、監督や隊長の采配一つでどの方向に向かうか決まるものだ。したがって、イレブンや遠征隊員は無条件にそれに従うのが当然だ。しかして、スクリーン上でもエドモンドとテンジンはあくまで2番手に徹して任務を遂行していたが、一身に期待を背負って出発した第1次アタック隊のチャールズとトムは酸素補給機に不具合が生じ、疲れと酸素不足のため登頂を断念。その結果、エベレスト初登頂の夢はエドモンドとテンジンに託されたが、さて、2人は……?

◆そこから始まるのが、後半からクライマックスに至る本作最大の見どころだ。結果はわかっているとはいえ、豆粒のような2人の男が酸素不足に悩みながら、また、さまざまな危険に直面しながら巨大な峰の中を一步ずつ交互に足を進めることによって山頂を目指していく姿は、やはり感動的。私がそんな本作のクライマックスシーンを観ながら考えたのは、人間の限界と、限界を超えた危険への挑戦の可否ということだ。

スクリーンを見ているだけで、エドモンドもテンジンも、とうに人間の限界を超えていることがよくわかる。こんな場合、日本の今の「教科書」によれば、「危険なことはやめなさい」となるわけだが、さて、1953年当時は?また、ニュージーランド人という、主流ではない立場でイギリスの遠征隊に加わっていたエドモンドの決断は?

登山家や冒険家には、リスクへの挑戦という気持ちが不可欠。そして、本作の場合はたまたま結果オーライで成功できたが、もし失敗していれば……。

201

4 (平成26) 年7月28日記